第387号 昭和52年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和52年（1977年）
9月号（No. 387）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

過ぎし日の山と人たち
——永年会員になって・年次晩餐会での挨拶をもとに——
（佐々保雄）……（1）
1976年 UIAA 総会の概略
（佐藤テル）……（3）
武田さんのお墓……（3）
山を歩く
一・三会のバンザイ山行
（近藤有慶）……（4）
山菜を食べる山行
（田村俊介）……（5）
図書紹介・吾妻小屋日記……（6）
自然保護情報
春スキーとゴミ（武藤清次）……（10）
さよなら　加納さん
（富田健一）……（6）
ルーム基金募集のお願いと
基金応募者ご芳名……（8）
報告とお知らせ……（8）
会務報告・ルーム日誌・会員動向など
……（8）～（11）

過ぎし日の山と人たち

——永年会員になって・年次晩餐会での挨拶をもとに——

佐々保雄

今夕の年次晩餐会で、永年会員に推薦されるから、ぜひ出席するようにとの、幹事からのお知らせで、先刻、札幌より馳せ参じました。

先刻、今西会長から、銀で縁どられた新しい永年会員証、番号は同じ九六九番ですが、これを頂きまして、たいそう有難く、また光栄に存じております。ただ今、他の、同時に永年会員になられた方々がご欠席の由で、代って挨拶せよのことで、ここに立つはめに相成りました次第です。

この「永年会員」というのは、入会して五〇年経つと与えられる栄誉の由ですが、もうそんなになるのかと、自ら驚いております。一方、会員として自分は一体何を果たし得たかと顧みますと、むしろ恥ずかしい思いを致しておりますのが、偽らない心持でございます。

私と山との因縁

私と山との因縁を思い記しますと、私は札幌生まれですが、小学校二年生の時、遠足で近くの円山、高さ三〇〇メートル台の小山ですが、これに登って、札幌の、トタンにキラキラ光る屋根、石狩平野の緑、青い日本海を遥かに見下ろし、子供にとってその大きな眺望が深く心に刻まれた、これが最初でなかったかと思います。

小学生の頃、今日山の画伯として山仲間に知られている坂本直行君やその兄弟たちと、郊外に飯盒炊さんに行き、さるかに（ざり蟹）やかじかやとんぎょ（とげ魚）を獲ったり、家近くの北大植物園では、近くなった昆虫学者の河野広道君をガキ大将に、甲虫や蟬を集めたり、こうした友達と、自然に親しむことを覚えたのも、後の山登りに結びつくように思います。また、当時の科学啓蒙家、原田光夫さんの『子供の聞きたがる話』を繰り返し読んでは、まだ見ぬ彼地に心を馳せたことでした。この自然と申しましょうか、地理への関心は、中学に入って、後に明神礁の爆発で殉職された田山利三郎先生の感化で、いっそう高まり、将来その方に進もうと心に決めました。その頃、中学生の登れる山は、札幌近くの山々ぐらいで、大雪山はまだ路もなく、ときおり新聞に載る旭川中学の小泉秀雄先生の記事などで、いつかはと望んだことでした。先生の多年にわたる大雪山の探究は、本会の『山岳』の特輯号として出、後に私どもにとってよい指導書になりました。

この、山への志向が決定的になったのは、大正十一年、ここにおいでの槇さんが、アイガーのオストグラートに初登攀された折のお話を、札幌の時計台でお聞きした時でした。その頃はまだ幻灯といっていましたが、ガラスのスライドを一枚一枚示されながら、物静かに、とつとつと情景を語られるのに心打たれました。堅い板敷の床にすわって、足のしびれるのも忘れてでした。

山と本に明け暮れた高校時代

その頃はまだ北大に理学部がなかったので、高校は田山先生のお奨めで、仙台の二高に上りました。中学三年の頃蝦夷富士の石室で一緒になった四高山岳部の今泉という方から、山登りなら四高か松高に行くといいよ、日本アルプスが近いから、と聞かされたのが心残りでしたが。

仙台では、親許を離れた自由さから、存分、その頃の高校生語でいう、生活をゲニーセンしました。早速山岳部に入り、それがやがて先輩の木暮さんや沼井さんの厚知を得、三年生の時に、御両方のお奨めで、本会に入れて頂いた次第です。まだ未熟、会員なんてとてもとても、とご辞退した挙句でした。

高校では、若気のいたりで、時間の許すかぎりサボり、山岳部の部屋にいるか、図書館に入りびたりでした。いわゆる駄本や阿部次郎の『三太郎の日記』、西田幾太郎の『善の研究』、倉田百三の『愛と認識との出発』などは当時の高校生の必読書だったのを思い出します。

山の本では、槇さんの『山行』は出版になってすぐ求めて、むさぼり読みましたし、高頭さんの『日本山嶽志』や志賀重昂の『日本風景論』、小島さんの『日本アルプス』、辻村伊助さんの『スウィ

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

ス日記』など繰り返し読んだことでした。後にこれらはいずれも、神田の古本屋で入手出来ました。なかでも、一高生の秩父での遭難記『山の犠牲』には、いたく打たれ、「山で死んでも本望だ」などとは言うまい、両親や友達を嘆かせてはならないと、心に誓いました。同時に進退への勇気と決断の大切なことも学びました。

その頃はまだあまり知られていない、東北の山々が、土地柄、主な対象でした。とくに積雪期の登山は、東北ではまだその頃は黎明期だったといえましょう。沼井さんにおだてられて、飯豊山などの記事で『山岳』誌上を汚したこともございました。夏休みはもちろん、週末によくどこかに出掛け、勉強は落ちない程度ですませました。低空飛行というやつです。古い仲間と寄ると、僕らはむしろ「部」を出たんだったなと話し合います。逆トツの方が、トップになるよりむずかしいんだなどと負け惜しみを言いながら。

何とか三年で卒えたのがやはり多いですが、中には四年、五年と、今でいう「留年」、当時の「落第」した連中も少なくありません。それが後年は皆、なかなかになっているのは、まことにおもしろいことです。その頃から「軍教」（軍事教練）が始まったのですが、その号令一下動かされるのが嫌で、よく休み、たまたま出ると、「お前の風邪は、顔の黒くなる風邪か」などと軍事教官にやられます。欠席届が風邪で届けてあるためですが、スキーに行ったのを知っての上での冷やかしでした。「古き良き日」だったわけです。

暗然とした「剱」の遭難

大学は東京でしたが、高校の遅れを戻すため、あまり熱心にルーム通いはしませんでした。ラートゲーバーやマウンテン・クラフトやバドミントンを読んだのはその頃と覚えています。言葉は、今でいうポルノを読んだ方が達者になるようなどと、先輩には教えられたのですが。しかし、休みにはどこかに登り、冬休みには札幌に帰省して、北大の十勝の合宿で正月を過しました。本会の支部長だった山崎春雄先生や秀さん（伊藤秀五郎会員）、長髪（中野征紀会員）、山健（山口健児会員）、納所（徳永芳雄会員）、直行（坂本直行会員）などとはよく一緒になり、また東大の大べら、小べら（塩川兄弟）、パラ（石原厳）などや村井さん（米子会員）とも除夜の鐘を共に聞いたこともあります。剱沢の雪崩の事故をラジオで聞いた時はまったく暗然としました。時折ルームで顔を合わせていた、あの元気な、叩いても死にそうもない田部君たちでした。この時の彼の「マムシ（彼の仇名）はえらくなれませんでした」と押し潰されて逃れ得ぬ梁木の下で書いた遺書の言葉は、「剱」というと必ず思い出します。窪田君だったか、寝袋を切りさいたら、ホーッと湯気の上ったという話と共に。

思い出深き数々の山々

昭和五年に、北大に理学部が新設され、そこの助手になりましたが、これは、内村鑑三の逝くなった東京には未練がなくなったからでした。その年早速、北千島に出かけたのを手始めに、千島や樺太によく出かけました。北千島ではアライト富士の頂に立ち、初登（三角点なし）の秀さんたちは雪の上だったのだから、ほんとの土は僕らが踏んだんだなどと、一緒だったグブラーさん（当時の北大独語教官）に会うと笑い合います。あの「グリンデルワルダーリート」を彼から教わったのも、この航海の時でした。国後のチャチャヌプリでは暴風に叩かれて、命からがら、それでも雨を含んでふくれ、重くなった寝袋を捨てずに下山しました。

日高の山には、氷河の遺跡を訪ねて幾度か通いました。山健やガタさん（山県浩会員）の撮ってこられたエサオマントッタペツの写真が動機でした。この日高を始め北千島にも同行した芽室のアイヌ人水本新吉（水本文太郎の息子）とは、十勝川から石狩川への川旅以来の仲で、私のデルス・ウザーラでした。今はソ連に抑えられている色丹島では、一ヵ月間過しました。高い山こそなけれ、出入りの多い海岸、全島を覆うお花畑、その間に点綴する色丹松、まさに国立公園ものでした。これもソ連に占領されている占守島からカムチャーツカの雪をいただいたカンボルナヤなどの山々を望んだ時は、いつかはと期したのですが、その望みはもう果たせそうもありません。その代りに、今の『山』にも千島と比較して書いたことのある、霧と嵐のアリューシャンには、つい一昨年北大探険部の学生たちと遊んで、夢の一端を果たしました。

これも既に遠くなってしまった熱河の丘や小山をうろついたり、朝鮮では田中薫さんと冠帽峯に氷河の名残りを嗅ぎに登りました。氷河といえば、沼井さんが台北に居られたので、二ヵ月近い計画を組んでいただき、新高山や次高山、南湖大山などでふんだんに氷河遺跡をうろつきました。沼井さんたちの初登攀された大覇尖山からシミタの断崖―これは児島勘次会員が初めて降りておられますが―を経て、今の雪山、次高山への縦走では、タイヤルの警丁（護身警備のため、同行）の持ってきた護身用の鉄砲で狩猟の楽しみを知り、樺太の山々では、熊用と称して携行した村田銃の散弾で獲った、山鳥（蝦夷雷鳥）の刺身や焼鳥が毎夕の食事を豊かにしました。

本当の活きた氷河に接したのは敗戦後のことで、米国のシエラ・ネバダやアラスカ、欧州のスイスなどでした。シエラでは、ハイ・キャンプの二週間に多くの山友だちが出来、それが縁で、シエラ・クラブの日本を訪ねた数次の隊のお世話をしたりしております。

未だ衰えぬ山への憧憬

こうして顧みますと、どうやら私の山登りは、激しい登攀よりはむしろ、ゆったりした山旅という風に思います。したがって、輝かしい山歴とてなく、今日に到っております。しかし、若い時登った連中が、やれゴルフ、やれ何などと話の花を咲かす中に、愚直と申しましょうか、ただ山登りのみに喜びを覚えて、いつの間にか半世紀を過したことになります。今夕のバッヂは、その一筋に感心感心といってたまわったものと存じ、たいそう嬉しく、喜んでお受けした次第です。今日御出席になれなかった他の永年会員も同じ思いではないかと存じております。幸いなことに、体力の衰えはやむを得ませんが、まだ健康でもあり、医者の友人からは、どこも悪くないが、頭と口だけが悪いなどといわれています。しかし、なお暇をつくってもどこかへとの意力は充分ありますので、これからも出来るだけ方々へと、楽しみにしております。

今夕は、どうもありがとう存じました。

一九七六年UIAA総会の概略

佐藤テル

今回はバルセロナの教育会館で開かれ、参加団体三十三、有投票権国は二十八であった。

議事の主なものを記す。

一、Fédération Nationale de Spéléologie et d'Alpinisme（ペルギー）彼らの活動は登山よりもむしろ洞穴学的であるので入会申込は却下する。

二、リオデジャネイロ山岳会は経済的理由で退会とのこと、しかし従来通り機関誌は送る。

三、ダージリンのヒマラヤ登山研究会は会費未納及び登山の活動ほとんどなきため除名す。

四、モロッコ山岳会も除名、ただしフランス山岳会の一部として認める。

五、安全対策委員会。各グループの責任者は、

1、今年中にピッケルの規格標準を提示すること。

2、登山装備類の研究及びヘルメットの特殊研究及びクライマーの登攀の理想的バランスの発表。

3、UIAAマーク使用に関する審査のため、申請受理山岳会は許可委員会より証明書を受けること。審査委員会は同マーク使用具の検査を主たる事業となし、製造者と綿密な連絡をとり、その用具の宣伝につとめること。

六、山岳汚染。Roubel 委員長はアルプス及びヒマラヤ地方の汚染蔓延につき悲観的報告をなし、これは各国が登山大衆に対し責任ある指導をし汚染をいかなる形にせよくい止めるべきで、委員会はその指導に努力する。

七、青年部 G. Friedl 委員長は七七年のオーストリヤ及びポーランドの青年部の登山協力に感謝し、十二歳より十四歳までと十八歳より二十五歳までの二組に正しい登山訓練をする。国際キャンプ参加員は一〇〇スイスフランを支払うこと。

八、山小屋委員長 C. Cevey 氏の後任に I.C. Meyer 氏が任命され新しい議題として、

1、UIAA会員は山小屋宿泊費はすべて均一と改正されること。

2、UIAA会員はUIAAより保護と援助をうける保証のあること。

九、山岳スキー委員長 L.Zobele 氏、

1、冬期山小屋及び用具使用に関する情報交換。

2、スキー技術指導者の養成。

3、スキー登山における安全性及び救援法の確立。

なお雪崩探知機等については今後他の委員会の研究に俟つ、その結果を広く通報して欲しい。

十、競技登山及び登攀、年々盛んになるロッククライミングと山岳スキーとを区別し、起こり得るこの弊害を阻止する研究委員会を編成した。

十一、ヨーロッパ以外の国外遠征が盛んになるにつれて、ポーターの賃金は高騰し、シェルパ等が無秩序になりやすいことを会長は指摘し、今後は国家的遠征隊と個人的企画とを明白にするように委員会に指示を与えた。

十二、シェルパの養成 75—76年のこの養成はネパール山岳会内の事情で76—77年冬期に延期された。選ばれた指導者三名は現地を訪問し、諸問題を話したがシェルパの中にはヨーロッパ人指導の遠征コースを希望している。実際の目的はネパール人ガイドの養成及び組織作りである。

B. Jahnsen（ペルー代表）は将来このような指導訓練をアンデスでも行う可能性につき質問をした。会長はアンデスとヒマラヤは多分に類似しているので他のアンデス山岳会と折衝した上で決めたいと答えた。

十三、次に四ヶ年の任期満了の会長及び常任理事の改選である。

書記として多年UIAAにつくし、二つの遠征隊々長であり、高所に山小屋を建設するに多大の貢献のあったピエール・ボッシュは賛成24、白票42で選挙され、77年より80年まで新会長となる。

常任委員としてUIAAの最初の女性役員は元ジュネーヴ女子山岳会々長の Madame Regine Schneiter. 他の一名はジュネーヴ大学教授 Felice Jaffé である。

新常任委員は次の通り。

L. Extermann＝法務関係
G. Tonella＝機関誌発行
R. Schneiter＝書記
F. Jaffé ＝代表　（現副会長 Tzartzanas と共に代表を委任される）

会計及び監査役は再選され従来通り。

（規約改正の際監査役の任期を改めるようにと会長より希望提言があった。）

F. Hiess（組織委員長）はメキシコ開催は時間と費用の点で賛成しかねる、最も古い山岳会はヨー

武田さんのお墓

故武田久吉名誉会員のお墓が日光にできたと、直子夫人から次のようなお便りがあった。

このたび亡夫・久吉の分骨を去る五月二十六日に日光の東照宮のすぐ近く、大谷川の流れ沿いにあります浄光寺（日光市匠町七番一七号）にお墓をつくり納骨いたしました。

昭和四十七年六月七日に亡くなりました時には、故人の遺志で尾瀬沼に分骨するとお知らせ申しあげましたが、色々の事情で残念ながら達成できませんで今日まで毎日心を痛めておりましたが、幸いにも景勝地日光に墓地が見つかりました。

日光は亡き主人が、少年時代に浄土院というお寺を別荘に拝借して毎年夏を家族とともに過ごした思い出の地でございます。毎日のように周囲の山々に登って高山植物を観賞し、明治三十八年の夏初めてそこから尾瀬ヶ原を通って尾瀬沼に足を踏み入れたのでございました。

故人にとっては感銘深いこの地に眠りますことを、さぞかし喜んでくれていることと存じます。日光方面にご旅行の折にお立ち寄りいただけましたら、故人も喜ぶことと存じます。

（下略）

昭和五十二年六月　武田直子

（望月達夫）

ロッパに存在するのであるから、アルプスより遠くない地を選ぶべきであると主張す。UIAAはアメリカに代表者を派遣し同山岳会と諒解すべきであると提言した。

San Roman 及び B. Jahnsen はこれに対して反対演説をし「遠距離は海外の小山岳会に対し不利な条件である。この際、UIAAの国際的性格から云っても、なんとか、費用のバランスを考慮し、一度はアメリカで開くべきである、もしもメキシコで総会が開かれれば南米諸国政府を動かし、彼等山岳会を援助する機運になるかも知れぬ」と。

英国代表の D. Gray「おそかれ早かれUIAAは遠距離の海外山岳会からの招待を受けざるを得なくなるであろう。運賃でも、たとえばチャーター機なら、ロンドンよりメキシコは二五〇ポンドである。ロンドンよりバルセロナは一五〇ポンドで、運賃の問題は研究すべきである」と賛成演説をした。

会長はこれに答えて「UIAA総会をメキシコで開催するのは若き南アメリカ山岳会にとっては奨励となるが、充分な情報がないため今日決めるのは得策でない、従ってミュンヘンで開かれる運営委員会まで最終決定を保留する」。この提案は25対棄権（アルゼンチン・スペイン及びペルー）3で可決された。

十四、海外山岳会動静

アンデス山岳会はペルーの最高峰に登頂した。ペルーへの遠征隊はすべてペルーアンデス山岳会に連絡されればあらゆる援助を惜しまない。また遠征隊はその報告を同山岳会に提出されたい。

San Roman 氏は、ヨーロッパの山岳人が素晴しい岩登りにチリーへ来訪されることを望む。チリーアンデス山岳会はUIAAより疎遠にされているように感じられる、詳細な情報と経済的援助を期待したい。今回組織した Union Panamericana de Associaciones de Montanisms（汎アメリカ山岳協会連合）はUIAAとの連絡機関である。

カナダ山岳会。われわれは従来アメリカ山岳会に代理を願っていたが今回初めて総会に出席することが出来た。これはカナダ政府がスポーツ援助金を遂に支給してくれたからで大いに感謝している。過去二十五年間に会員は三倍に増えた。わが国には未登峰の山々がたくさんある。アプローチが長いので輸送が問題であるが将来に期待をかけている。ロッキー山脈の訓練キャンプは定期的に行われているのでUIAA会員の参加はわれわれとして大歓迎である。目下国立公園内に山小屋の建設を計画している。

Svenska Klatter Forbundet「スエーデン山岳会」は年々大きくなり、会員も五〇〇名に達した。非競技の登山スポーツの奨励、ヨーロッパにおける最後の野生山岳国の保護等を語り、最後に広大なる氷原地帯への探険をするすべての山岳人を心より歓迎する。

I. Wolf「'78年にチェッコにてザイルの試験シンポジュームを開く。目下アメリカ山岳会とオーストリヤ及びドイツ山岳連盟と共同研究中である」

ジュジ会長は「ソ連山岳連盟がパミールにて国際キャンプを計画中である。これはクライマーたちの交流のみでなく外国人に閉ざされた同地方へ訪問出来る機会でもあるので多数参加されんことを。

ENSA, FFM 及び CAF はシャモニに定期的国際キャンプを上級クライマーのために催していること等、UIAAはこの種の活動に感謝をしている」

最後に会長は任期中の諸君の協力に感謝し、この四年間は自分の目的達成には充分な時間を与えてくれた、最後に出席全員に代りスペイン山岳人各自の素晴しき歓迎に対し謝辞を述べられた。

歩く山を

一・三会のバンザイ山行

――岩手山から五葉山――

近藤有慶

私はいままで、岩手県内に一等三角点がいくつあるのか、どこにあるのか、まったく気にしてなかった。

昨年の焼石岳山行に、今西会長と同行、この柱石にめぐり逢うことを目標として全国行脚しているグループの存在を知った。

これが、一・三会である。

今年は五月の連休に岩手に来られた。今西会長のスケジュールには、奥羽山系と北上山系の異質の山容から選定し、四～五座を指定してあり、岩手山、物見山、五葉山、室根山、束稲山（クシネ）と五つの柱石を目標に、去る五月一日来盛された。あいにくの雨模様で、二日目の岩手山は山頂に達せず、途中の黒倉山、姥倉山の二柱石を手にし下山された。三日目、私は水沢から同行し、物見山（種山高原）の柱石を目指した。

この物見山は、県道水沢～大船渡間の中途にある。県道より北に入って、物見山（種山）、大森山、丸森山が峰を連ね、北上山脈の南部分水嶺をなしている。上閉伊、気仙、江刺、東磐井の四郡にまたがる一大緩傾斜地である。普通これを種山と称しており、県営種山牧野が南北二〇キロ、東西一一キロにわたる長方形の高原である。詩情あふれる放牧地で、宮沢賢治の歌でその名が高い。晴れた日、山頂からは、西方はるかに北上川が白蛇を思わせるように白く光って、岩谷堂、水沢、北上の集落がながめられる。また、奥羽山系では、岩手山、焼石岳、須川岳（栗駒山）の各主峰が雲上に頭を出しているのが見える。

種山高原少年自然の家より徒歩一〇分位で山頂に達して、突上げバンザイを三唱する。どんよりと曇って眺めはよくないが、昼食をとる。岩手医大の佐藤先生は、木地椀に、あんこ餅の山盛りとまた軍配餅を全員に振舞い、みなさんは私と同じものを食べた、あとは同じものが出るという学説を一説、その他ウンチクを披露される。北海道から参加の柳田、萩谷両女性、学説を耳から、口には餅を平気で入れる。

昼食後、釜石の村上さんが迎えに来ているのだが会えず、すれ違いとなった。国道一〇七号から「民話のふるさと」遠野で待合せ、笛吹の峠を越え一路夕暮れの釜石市両石に入る。宿泊地の花江ホテルで、やっと村上さんと逢えた。食事には、三陸海岸特産のホヤ、ウニや新鮮な魚、貝が盛り沢山、天気まつりは盛大であった。

今西会長は最後までホヤには箸をつけずに残された。七〇余年、口にしなかったものを、いまさら食べられないとのこと、関西育ち

の人は、ほとんど食べないらしい。

四日目、五時ホテル前を出発、国道四五号線を南進、市街を通り抜けて唐丹から赤坂峠へ約一時間で到着する。村上金吾氏（明治二十八年生）、村上力氏の親子を先導に頂上をめざす。

この山は、海岸ぞいの山群中随一の高峰で昔は信仰の山として多くの登山者を迎えた。現在は道路も整備され一般の登山者、ハイカーでにぎわう。豊かな動植物の繁殖、生息地としても有名である。私達は一般的な大船渡市側の赤坂峠から畳石を経て、ダケカンバ、アスナロ、シズナラ、シャクナゲの樹林を抜けると、昨夜来の冷え込みで出来た霧氷が樹枝から、カラカラと落下する。頂上に着くと五葉霧中（五里に五葉を当嵌て）で何も展望できない。気温は低下し、例の突上げバンザイを三唱、神社で参拝して山小屋に駆込む。天気が良ければ早池峯山はもとより、岩手山、和賀岳、焼石岳、須川岳（栗駒山）などの奥羽山脈も望まれるのである。往復約四時間の山行も終り、つぎの室根山へ急ぐ。

昔はテクテクと歩くコースであったが、現今ではドライブを楽しむ自動車道が山頂近くまで整備され、ハイカーでにぎわう。

一関から迎えの清水さんとまたすれ違いとなった。折壁の駅で再度探した。千厩の駅前から金精神社、摺沢経由で、つぎの束稲山に行く予定であったが、三島温泉口から道を違い、枯木峠を経て松川に出る。雨が降り出し束稲山へと急ぐ。

この山は奥羽古代史に名高い「たばしねやま」五九五・七メートルである。その昔東山（とうざん）と呼ばれ、胆沢平野にくりひろげられた千余年の民族興亡史をじっとながめてきた歴史の山である。山頂まで車で登り柱石を手にする。平泉町中尊寺の宿坊束稲荘に入る頃、雨は音をたてて降ってきた。

本堂での懇親会で、またの再会を約し名残りを惜しんだ。

〈今回の山行出席者〉

今西錦司、高木碕男、本郷孝文、高木志茂子、平野明、柳田凉子、萩谷三枝子。

岩手支部より、佐藤敏彦、中谷充、近藤有慶、菅野峰夫、村上力、村上金吾、湯浅俊行、花坂賢治、森一彦、小の寺正英、清水佐二郎、佐々木佐太郎、今野兵蔵、鈴木盛男。

（一九七六・五・二十五）

山を歩く

山菜を食べる山行

――越後浅草岳――

田村俊介

食卓にはマタタビ、アケビ、ナズナなど二十数種の山菜料理が並べられている。テンプラあり、オヒタシあり、煮付けあり。それに鯉こく、虹鱒の焼いたの等々。酒も豊富である。寄付の酒も数本ある。六十余名の参加者がその山菜の種類と量、一升ビンの数の多さに圧倒されながら、食卓を囲む。最初のうちは山菜学の権威である片岡先生やわれわれの宿舎松屋のおかみさんの説明を聞きながら、山菜の名前とその形状及び味を一致させようと努力し、神妙にこれらを賞味していた。がそれも数分の間、説明を聞くそばから、初めて耳にする山菜の名前は右から左へと通り抜けてしまう。えい、ままよと、もう説明は聞き流し、片っぱしから食って行った。そのうち胃の中は山菜の葉と茎で、いやが上にもふくらんで行く。マタタビ酒というマタタビの実を浸した酒もまわってくる。リキュールに似ている。うまい。猫でもなければ飲んでも別に悪影響はないとか。そのうち歌になる。地元の越後支部会員の方々の民謡も賑々しく披露される。外は雨がぱらつき、明日の天気が気にかかる。宴会も終りに近づいた頃、越後支部特別の取計いで神主さんの祈祷が始められるという。もちろん、明日の好天を祈ってもらうのだ。一見神主らしく装いをこらした支部会員の方々が登場。大きな白々とした大根を××に当てがい、これをさすりながら、何ごとかつぶやいておられる。「あした天気になりますよう」というようなお唱えだろう。何だか妙な具合で、これで明日は天気が良くなるのだろうか。

宴は盛況のうちに幕を閉じ、就寝する人あり、炉辺談話にうつる人あり。翌朝は六時に大型バスで出発した。昨夜幹事役の中川さんが参加者に「浅草岳に登られない方々は」と聞いた。応答者なし。かくて今日、老若男女全員が浅草岳に向うバスの人になった。

六月の林道は緑にむせかえっていた。周囲の山や谷はまつわりつくような緑の木々に埋められ、アスファルト・ジャングルの住人には息苦しい。

緑の過密と人の過疎。人の過密と緑の過疎。日本の狭い国土は、何と極端にこの二つの地帯で区分されているのか。

入広瀬の宿舎から一時間余で浅草岳の登り口に着く。ここで宿舎で作ってもらったにぎりめしをほうばり、朝食を終えた。七時半に登り始める。生い茂る木々でトンネルのようになった山腹を登って行く。雨は時々ぱらつくぐらいで大したことはない。道はところどころ泥沼状態。やがて稜線に出る。大きな雪田がまだ解けずに残っている。

第一陣は九時半に頂上に着いた。後続隊も十時近くに頂上に到着。記念撮影。二歳の黒沢君、五歳の穴田君、六歳のあずさちゃん、若い親爺の背に負われて頂上に着いた。「この人達が何年か後のJACの中心人物になるんだろうね」横の初老の神士が嬉しそうに言われる。それからめいめい下り始める。大部分の人達は山菜を採りながら下った。

十二時半頃には、全員がバスを降りた出発地点の広場に帰って来た。山菜を抱えて、腹をすかせて、そこにはこくのあるタケノコ汁の匂いが漂っていた。ビールやジュースの栓が抜かれており、泥に汚れた格好のままぐいと飲み干す。それから近くを流れる山川のひんやりした水で、汗でぐっしょりになった身体を拭く。広場の片隅でテンプラの用意が整っており、各々採って来たばかりの山菜をテンプラにする。みんなゆっくりと満ち足りたように、宿舎の人達や支部の人達によって用意された昼食をほうばった。タケノコ汁もうまかったし、ウドの煮たものもうまかった。自分で採った山菜（山菜と確信しているのだが）のテンプラもうまかった。

昨夜の祈祷の効果はようやく現れ始めた。青空が見え、初夏を思わせる陽光がふり注ぎ始めた。昼食を終えた頃にはすっかり晴れ上った。帰りのバスを待つ間、日光浴を楽しんだり、山菜取りに出かけたり、ゆっくりと時は流れた。

最後にこの山菜行の設営や講師を引受けて下さった片岡さん、越後支部の諸氏、松屋の皆様の御好意、集会委員の方々の御尽力に心より感謝の意を表する次第です。

また、こんな楽しい集会に参加できなかった会員の方々、次の集会山行には是非参加下さい。初めて参加される方々には、集会委員の方たちが特に心暖る配慮をしてくれることを付記しておきます。

（賞味した山菜）

アンニンゴ、マタタビ、サンショ、ゼンマイ、タケノコ、フキ、ウド、トビタケ、シメジ、カノシタ、アケビ、アザミ、ナズナ、ウルイ、キクラゲ、フキノトウ、ノザワナ、コゴミ、ミョウガ、アサツキ。

図書紹介

吾妻小屋日記

二階堂匡一郎編

本書は吾妻小舎の開設（昭和九年）以来、現在までの小舎利用者が、らくがき帳に記した文を余す所なく載せたもので、一読その労力と出来栄えに敬服させられる。

編者は、四十数年にわたるぼう大ならくがきの美文迷文酔筆すべてを、先人の貴重な思い出として、家業の余暇を利用して整理し浄書し、原稿用紙に写すこと二千六百四枚、四ヶ月を費したという。そして編集に移ったというが、汚れたり薄れたり、また意味あいまいな原文を判読するだけでも、大仕事だったであろう。

昭和九年（一九三四）、仙台鉄道局〝吾妻小舎〟開舎　お泊りの方のみならずお休み下さった方々もご芳名お誌し下さい。管理者「ぬる湯温泉」二階堂　とあるのも当時の小舎番の素朴さを物語っており、この言葉に始まる本文は、B5判二段組で八百ページ（本文だけで）に及ぶ。

編者は「山小屋日記は、そのまま小屋の歴史、山の歴史」の考えのもとにこの仕事に取組んだ。原文の誤りなども出来るだけ尊重してあるので、生まの感じがする。小舎に着いた時の安心感、口ずさむその時代の流行歌、夜の瞑想、天候の良否への期待や不安、小舎への感謝や不平や注文、詩歌俳句とさまざまで、らくがき帳では読みづらい文も、こうして立派な活字になると、興味深く通読させられる。

地元の伊藤弥十郎氏は別として、鹿子木員信、武田久吉、藤島敏男、野口末延、額田敏、塚本閣治、町田立穂、田中菅雄、深田久弥、川森時子諸氏をはじめ、多くの古い岳人の名が見えるのも懐しい。

また旧漢字使用の頃の文は、新漢字に改めずにしてあるが、これもその頃のニュアンスを匂わすのに役立ち、しかもこの数が夥しいので、印刷も骨の折れたことであろう。

編集区分は昭和九―一八年を第一編、二三―三〇年を第二編、三一―四〇年を第三編、四一―五〇年を第四編とし、各編の扉ページには、昭和何年は何ページより、という小見出しがある。また本文のページ毎に、日本年号と西暦を以て、昭和三十年（一九五五）という具合に印刷してあるから、どのページを開いても、年月が瞭然で、これもこまかい配慮である。

巻頭に写真一八ページあり、厚いアート紙を使用して鮮明である。この中に、小舎新設当時やその後の宣伝ポスター七枚が色彩で入っているが、近頃の駅頭などで見るものよりつつましく、美しい。たくさんの登山者の服装、ポスターの人物、小舎の写真のどれにも、山と小舎の変遷が窺われる。

本文の他に年表が付され、明治二十六年（一八九三）一切経山噴火以降の吾妻山のおよその出来事が列記されている。吾妻山及び吾妻小舎史として要を得たもので、昭和九年宿泊サービス料三〇銭、食事料朝二〇銭、昼二五銭、夕三五銭とある。

二階堂伊蔵氏と当時血気さかんの哲三氏、哲雄氏の二人息子とは、吾妻山を熱愛する気持から、採算にならないのを度外視して、小舎管理を引受けた由で、三氏の活動ぶりも数葉の小写真で見られる。そして今、哲三氏の息匡一郎氏（会員）が二階堂一家の天与の仕事の一環という気持で、この大冊を完成された。

印刷鮮明、所々に挿入の寄せ書や小舎内スケッチも面白い。製本は八五〇ページにわたる大型本にかかわらずくずれがなく、ぴんとしている。表紙の厚さも色も上品であり、背表紙だけに押された金色の書名もマッチし、字体もよい。見返しの「吾妻岳噴火実見之図」は雄大で、作者名など知りたかった。カバーの樹林の図案は、二紀会同人で地元の西村栄悟氏、おだやかな筆致である。良書。

私は昭和十二年冬、ぬる湯に約一週間滞在しスキーの山を楽しんだ。宿の前で雪の中に時計を落したのを、そこで毎日スキーをやっていた、四、五歳位の男の児が、後日見つけてくれた。編者の幼年時代のことだった。今回私の所へ本書を贈って下さったのは、哲雄氏である。

昭和五十二年二月一日　福島市桜本字温湯「吾妻小屋日記出版委員会」発行　非売品

（川崎精雄）

さよなら加納さん

富田健一

そういって逗子のお宅の玄関でお別れしたのは亡くなられる二十日前だった。その時はこうした永遠のさよならがそこにきて潜んでいようとは夢にも思えなかった元気な加納さんであった。

その日六月二十日の朝は梅雨の季節でありながら好天気で、そよぐ風が涼しくさえ感じられる爽かさだった。広い書斎に通されると火鉢がどっかとおかれ、桐炭が入っていた。四十七年十一月第一ホテルで催された『探検と冒険』の出版記念会以来の対面だったが、

ありし日の加納一郎氏
逗子のお宅で奥様とご一緒に
撮影／富田健一

当時と全くお変りなく元気で、四方山の話が次つぎと流れ、とても御機嫌がよかった。JACの名誉会員にしていただいたが、何だか口に封印されたようでと笑われたり、第一ホテルの会合の時には皆さん忙しい御用のある方ばかりなのに、あんなに大勢が遠くからも来ていただいて有難いことだったが、病院から来て下さったらしい松方さんも亡くなられ、札幌の館脇先生も先立ってしまって淋しくなったね、と述懐ひとしきりだった。またケルン同人の方々の噂が次々出たあと、記念会の席上北大の方々に交じって今西（錦司）さんもうたわれた北大恵迪寮々歌の想い出から「今西さんも北大にきたいようだったが、お家が京都の格式ある旧家であるため遠く札幌に出ることが許されなかったのでないか、だから恵迪寮歌には今西さんも懐しさもこめて飛入りして下さったのでしょう」と元気一杯だった若き日のことどもを回想されて、いかにも楽しそうだった。

戦時中関西支部を預っていた時大毎との共催で「山岳研究講座」を夏冬二回開催したことがあり、その講座内容（加納さんにも第一日に「登山と探検」と題する講座を担当していただいた）を朋文堂から出版することになった。この時加納さんから一字一句を大切に校正することをはじめ、数々のアドバイスをいただき、それがその後なにかにつけ私にどれだけ役立たせてもらったことかを想い出して、改めてお礼を申上げたのであったが、今となってはよい時にお伺いしたものと思う。そのあと南向きの気持よいお庭に出て奥様も御一緒に写真をとったが、これが最後の写真になったのでないかと思う。帰ろうとすると「もう少し話して食事していっては……」と引きとめて下さったが、またこの次にと謝辞、玄関まで送っていただいた。もしタクシーがなかったらバスで……とわざわざバス券をとりに室へ行かれたり、すべてがお元気だったことを想い出すと突然の訃報が夢のようであり、もう少しおことばに甘えてお話をしておけばよかったのにと悔まれるのである。

帰宅後に送って下さった北大、三高の寮歌の入ったカセットテープを充分拝聴の上お返しする時写真を入れておいたが、その返事が加納さんの自筆でなく三男登氏のものであった。

「父はこの二、三日ちょっと体の具合がすぐれず代筆します、写真をみて喜んでいました」

おやという思いはした。だが私は不覚にも二、三日でよくなられるような気がしてすぐお見舞いを出さなかったのであるが、その二、三日後に果しない永遠の旅路に向われてしまったのであった。人の命のはかなさをいままたつくづくと味わわねばならなかった。

加納さんには随分多くの立派な研究、評論、随筆があって、われわれはそのいずれにも多く教示をうけ影響されてきた。いずれその道に精通の先輩から加納さんの功績について改めて拝聴することが出来ることと思うが、昭和四年早くも『氷と雪』の名著を出され、私達に驚きと共に興味を植えつけられたし、その二年前に出された処女出版（？）『北海道のスキーと山岳』は北海道の山々がいまほど知られていない当時としては唯一無二の研究書であり、案内書でもあった。いずれも五十年近く前の著書であるが、その後『探検』という季刊誌を出されたように探検に関する多くの著書、訳書を出してられる。そして最後に全集という形でなく加納さんを囲み、加納さんを畏敬する多くの俊秀な方々の協力で四十七年に『探検と冒険』八冊が日本の探検全集ともいうべき姿で上梓されたのである。第一巻には梅棹氏が出版に至る経緯とその意義を詳しくのべて居られる。『ケルン』誌に『探検』誌に青春のほとばしる闘志を注ぎ、老境に入ってからも憧れのグリーンランド、アイスランド等北極圏の空を飛ばれた加納さん、日本の探検界のみならず科学世界全般のためにも一日も長く生きていてほしかったと痛恨の思いがする。

戦後しばらくマイシンとかペニシリンの入手困難の時があり、比較的入手しやすかった私はそれらを札幌の加納さんに数回届けたことがあった。そして充分気をつけられすっかり快くなっておられたと思っていただけに、このたびいただいた加納さん自身のお別れのことばを手にして呆然自失したのも当然といってよかった。

御冥福を祈りながら。合掌。

名誉会員　加納一郎氏

七月十二日心不全により逝去。享年七十九歳。明治三十一年（一八九八）七月大阪市で誕生。中学時代から御岳、槍ヶ岳、京都近傍の山々に登り、北大在学中は板倉勝宣氏らと十勝岳、芦別岳、旭岳、その他の冬季登山を行うと共に『山とスキー』の編集に参画した。その後RCCの同人となり雑誌『ケルン』および『探検』の編集に従事し、また極地探検の研究に半生を費し、極地関係の著書訳書は『氷と雪』、『世界最悪の旅』等きわめて多い。大正七年（一九一八）十月本会に入会し（会員番号六四三）戦前関西にあって理事となり会のため貢献した。昭和四十三年（一九六八）永年会員、昭和四十八年（一九七三）十二月名誉会員に推挙された。葬儀は十三日近親者のみで行なわれたが、西堀会長が参列した。本会はここに深く哀悼の意を表する。

（望月達夫）

報告とお知らせ

山菜山行　越後浅草岳
——第三五七回　現地小集会——

6月11日（土）、あいにくの雨天にもかかわらず、会員・非会員多数の参加者を得、上野駅10時25分の列車で一路越後入広瀬松屋へ向う。午後6時半より、片岡博氏を囲み、山菜料理と地酒との盛大な宴会となる。皆、楽しい一夜を過す。

翌12日、小雨の中、お年寄から下は二歳になる坊やまで全員が元気に山頂に登り、帰りには青空も見えだし楽しい山行を行うことができました。

なお今回お世話になりました越後支部の方々、松屋の皆さん、ありがとうございます。

（別項・田村俊介氏の文参照）
参加者72名。

ナダレ体験をきく会

日本雪氷学会秋季大会に際してナダレ懇談会がおこなわれます。関心のある方は是非御参会下さい（無料）。

会場　野口英世記念会館（新宿区大京町二六　千駄ヶ谷駅から北東へ七分　電三五七—〇七四二）

日時　10月17日（月）　1時半～5時半

内容　録音構成「黒部のほうナダレ体験」。登山者のナダレ体験談。ナダレの映画2本。

（遭難対策委員会若林隆三）

第1回　JACノミの市

初の試みとしてJACノミの市を開催します。みなさまのご協力をお願いいたします。

日時　10月29日（土）午後3時～午後7時。

場所　東京神田全電通会館

形式　バザーおよびオークション（底値は提供者が決定）

＜出品例＞

・記念石　三極（エベレスト、南極、北極）、マナルス、ナンダ・デヴィ、ヒジャヌー等の石。
・署名本　原則として定価販売の予定
・絵画　山岳画（ヒラリー氏署名のヒマラヤの絵など）
・年代もの登山具　山内のピッケル等
・ガラクタ登山用品　不要になった品、余っているものなど
・その他、いわれのあるもの、めずらしいもの、海外みやげ、民芸品等

お願い　出品名を日本山岳会事務局までお知らせください。

なお当日は、軽食、ビール、おつまみなど用意しますので、ご歓談の場としてもご利用ください。

（JAC会員は入場無料）

（集会委員会）

第10回図書交換会

前号でお知らせしましたように今回10回目を迎える恒例の図書交換会が、10月22日（土）に行なわれます。

本年はとくに10回を記念して、「稀覯本コーナー」、「百円コーナー」などの試みを含め、盛大に行ないたいと準備しておりますので、会員多数の参加を期待しています。

なお、毎回多くの会員からご協力をいただいておりますが、どうぞ本年も、お手持ちの書籍、雑誌等のうち、会のために役立たせていただけるものがございましたら交換ご希望のものを含めまして、一冊でも結構ですから、ぜひご出品下さい。

ご出品いただけます方は、締切日の10月5日（水）までに、「出品書籍名（希望価格も）、会員番号、住所、氏名」をお書き添えのうえ、図書委員会までご連絡下さい。

（図書委員会）

わたしたちのルームをわたしたちの手で!!

ルーム基金募集のお願い

すでにご承知のとおり、日本山岳会は、今度、自前のルームを持つことになりました。購入資金のうち一千万円は会員各位からの募金によるものです。すでに会員各位には、基金募集を書面によりお願いして、数多くの会員から別項のような申込みをいただいていますが、会員各位のいっそうのご協力をお願い致します。

＊**募金申込み期限**　昭和52年10月末日

＊**募金払込み期限**　昭和53年12月末日

＊**振込み先**
三和銀行本郷支店
普三五一—三七六一二
協和銀行神田支店
普一二六—五七四五九三

会務報告

7月理事会

7月11日午後6時30分、本会ルーム

▽出席者　西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、皆川、鈴木、倉知、黒石、越田、浅田各理事、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原各評議員
委任　牧野内、嵯峨野各理事、村山監事

▽報告その他

・故中原万次郎氏遺族より寄付あり、運用について記念となるように後日検討　（宮下）
・ルーム資金募金の件　（望月）
募金のお願い状発送
・一九二四エベレスト登山8ミリフィルム国分氏より寄贈
・「山岳」70年刊行　（越田）
・図書
第10回図書交換会を10月22日開催　（中川）
・集会
9月10日、藤島玄氏より「越後の山の話」を聞く会を開催。
10月より写真勉強会を開催　（鈴木）
・海外連絡
UIAA総会が10月14日～16日までメキシコ市で開催される　（倉知）
・山岳編集
「山岳」71・72年は合併号とする　（浅田）
・青年懇談会
ドイツとの交流登山で8月第1週より3週間、柳沢隊長以下8名を派遣する

東京銀行本店
普○○一―一二五一○五
中央信託銀行本店
普○○一―一二四九○五
郵便振替口座
東京三―四八二九
名儀はいずれも日本山岳会

＊**募金方法**

東京都、神奈川、埼玉、千葉各県に在住される会員は、一口金一万円。その他の地域に在住される会員は、一口金五千円。

いずれも分割払込みを受付けます。

ルーム基金応募者ご芳名（2）

（昭和52年8月15日現在
敬称略・順不同）

〔**東京の部**〕一口一万円　数字は口数

（10）早川種三、国分勘兵衛（5）吉武正子、田口二郎、風見武秀、中河与一、佐藤久一朗、宮下秀樹、浜野正男、飯野亨、高橋定昌、大塚博美（3）横山厚夫、国見利夫、大野俊夫、遠藤光男、青木昇、辰沼広吉、山田哲郎、串田孫一、大木操、村山金吾、中島寛、田部井淳子、名須川浩、村井米子、片岡博（2）雁部貞夫、深田志げ子、佐々保雄、市川章弘、阿部慎二、広谷光一郎、古谷聖司、エーデルワイス・クラブ、中西章、近藤信行、渡辺兵力、松永敏郎、岡建治郎、和田一男、市川次良（1）山崎徹、立田実、山田和雄、松村潤、松本清、関口令安、細井隆司、大倉寛、牧繁録、市川正、山口一孝、大井正一、原田衛、近藤暉、湯川竜二、高田真哉、新谷明喜、茶谷東海、藤江幾太郎、小倉厚、故藤島敏男（紀子）、小林猛臣、佐藤勝子、上仮屋正和、滝口脩、滝口操、井田英彦、堀尾勝己、John G. Day、宇野佐、町田立穂、関口周也、神谷恭平、松本慎太郎、小原俊、目黒元、石森芳太郎、鈴木英一、中村純二、野口茂、松本善二、野崎裕美、中村小一郎、金子宏、山本光二、名児耶達男、高見沢領、渡辺嘉男、小林幹三郎、匿名氏（0.5）中山俊夫

小計一九五・五口
金一、九五五、○○○円

累計四一八・七口
金四、一八七、○○○円

〔**地方の部**〕一口五千円　数字は口数

（20）水野祥太郎、羽田英彦、中田清兵衛（12）越後支部（10）兵庫県山岳連盟会長宮崎辰雄、柴田均二、徳永篤司、大塚武、（6）田村聡明、山川力、（4）鹿野勝彦、水野公男、水野政博（2）金子正、石間信夫、小池恭弘、柳谷正義、故伊藤秀五郎（花子）、今川良雄、高尾徳繁、永井俊三、玉島利一、柴山八郎、板橋元一、平野征人、権藤太郎、青木巌、小野正喜、幣内規男、小滝清次郎、綿引安人、井関扶、佐藤耕三、梅本実、相川修、大島秀夫、薬師義美、高沢光雄、田淵邦彦、酒井俊雄、林稔、杉田博、京都山岳会、清水悟郎、藤島玄、佐藤金一、室賀輝男、村田栄身、矢野真、滝田博之、大橋秀一郎、小崎司郎（1.2）山本直也（1）久保田昭二、松村高、大間知邦太郎、磯田和夫、成沢暢、西郡光昭、荻野昌宏、中村一雄、福田文二、永田良治、山本忠誉、古賀康義、熊谷太三郎、鈴木祐幸、鈴木敏雄、相山之良、遠藤靖彦、千田早苗、山中三男、松野賢珠、子吉格郎、中尾佐助、松本徳夫、大野正子、新日鉄八幡製鉄所山岳部、古田修司、山田和彦、大場貞吉、丸山敏郎、柴田昌亮、佐藤節子、麻生国雄、山田一男、丸茂キクエ、境野俊男、宮本貴文、金森繁三郎、渡辺宏之、内ケ島吉広、三井茂子、林雄吾、前田浩、斎藤清吉、小岩井治、本多夏生、東川尚三、大森常三郎、田原善治、高田允克、村田数之亮、蟹江健一、近藤有慶、佐藤次彦、木本善重、南崎大海、柴崎徹、永石良元、斎藤哲郎、小西毅、阿部恒夫、渋谷博敏、田崎順郎、佐藤一栄、上村幹雄、井口正男、立川重衛、山崎幸和、井口拓夫、井手貢夫、北出箕吉、金沢健、重村伝平、西尾俊子、小田島政行、大場摂雄、栗岡豊、垣外富士男、石崎貞子、湯浅充泰、大沢権貞、相原軍一、藤井猛、藤田博、高田光政（0.6）小野健（0.4）桜井昭吉

小計三○○・二口
金一、五○一、○○○円

累計四八一・一口
金二、四○五、五○○円

合計　金三、四五六、○○○円

累計　金六、五九二、五○○円

申込人員　東京　一九一名
地方　二○四名

＜訂正＞前回（1口）に梅本知栄子氏が欠落、同じく柳沢シゲ子は柳沢の誤まりにつき訂正します。

▽**各委員会メンバー**（52・53年度）

・**総務**（担当理事）宮下秀樹、高遠　宏

・**財務**（委員）高遠　宏、中島寛（担当理事）山本健一郎

・**山岳編集**（委員）近藤信行（委員）山崎安治、金坂一郎、山本良三、中島　寛、節田重節、池田智津子、井草長雄（担当理事）倉知　敬

・**会報編集**（委員長）山崎安治（委員）片山全平、近藤信行、高遠宏、小倉　厚（担当理事）大森久雄

・**山日記編集**（委員）武田満子、上原真一、井口邦利、池戸誠二郎、安藤利亮（担当理事）皆川完一

・**山研**（委員長）折井健一（委員）高山忠四朗、安彦六郎、奥原教永、小原晴子、高遠　宏、羽賀育子、宇田川芳伸、前神直樹（担当理事）小倉董子

・**集会**（顧問）神崎忠男（委員）河村憲二、小原　俊、伊丹紹泰、桐生恒治、福島健一、岡沢修一、岩本和夫、和田誠一、阪本伸一、児玉　茂、道向和子、池田智津子、加藤　隆、佃　和夫、佐藤裕、新井陽一郎、藤本敏行（担当理事）中川　武

・**海外連絡**（委員長）吉沢一郎（委員）成瀬岩雄、近藤　等、牧野文子、神原　達、関口周也、倉知　敬、田村俊介、丹部節雄、秋田しおみ、松沢憲夫、清水春

―― 売場ご案内 ――

最新入荷及び好評の本・報告書

✠氷河の星（串田孫一）並製2,800円・限定本16,000円　✠山あればこそ（渡辺公平）880円

✠遙かなる氷河の果てに―マッキンレー登山報告と資料1976年―（長野県アラスカ登山隊）2,500円　✠ベルク15号（ベルク同人）450円

✠巻機山の自然（観光資源保護財団）2,000円

✠山の天気を知る法（飯田睦治郎）1,300円

✠天気の読み方（庄司亮）1,200円

✠ナンダ・デヴィ縦走1976（日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編）3,900円

✠山の本販売目録1977（茗溪堂）950円

茗溪堂 ＜山の本の売場＞ お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

美、吉田隆三（担当理事）鈴木郭之

・**指導**（委員長）川上　隆（委員）山崎安治、金坂一郎、松永敏郎、大倉昌身、宮崎紘一、山本良三、高橋　聡、神崎忠男、橋本　清、牧野内昭武、小川　武、長塩憲司、浜口欣一、三渡忠臣、広田靖典、加藤正身、伊丹紹泰、桐生恒治、重松保宏、福楽勘男（担当理事）嵯峨野宏

・**高所登山**（委員長）金坂一郎（事務局長）神崎忠男（委員）大森薫雄、原　真、宮下秀樹、中島寛、平野真市、浜野吉生、湯浅道男、高橋善数、池沼　慧、広島三朗、雨宮　節、伊丹紹泰、池田常道、桐生恒治、伊藤行人、小林政志（担当理事）田村俊介

・**医療**（委員長）辰沼広吉（委員）田村扇一、北　博正、中島道郎、住吉仙也、広谷光一郎、長尾悌夫、原　真、山本良三、三方淳男、浜口欣一、金子　宏、川久保芳彦（担当理事）大森薫雄

・**図書**（委員長）山崎安治（委員）岩渕泰郎、北島光子、横山厚夫、近藤信行、河村栄二、大橋晋、冨田美知子、堂本暁子、宮下啓三、伊藤博夫、山本良三、田村俊介、山下　潔、武田満子、滝川　清、河野悠二、大森久雄、松家　晋、岡沢裕介、岩瀬晧祐、福島健一、飯田進、池田智津子、（担当理事）越田和男

・**自然保護**（委員）渡辺公平、島田　巽、大野俊夫、織内信彦、渡辺正臣、板倉勝正、皆川完一、中村純二、宇野　佐、国見利夫、小倉　厚、山本良三、武田満子、嵯峨野　宏、井口邦利、内村鉄次郎、三浦幸一、池田智津子、渡辺光則（担当理事）鈴木郭之

・**婦人懇談会**（顧問）村井米子、川森左智子、小倉董子、山口節子、冨田美智子（委員）伏見紀子、斎藤　桂、秋田しおみ、梅野淑子、清水春美、高本信子、田中清子、冨田由紀子、加藤節子（担当理事）黒石　恒

・**青年懇談会**（委員長）今村千秋（委員）大倉昌身、高橋　聡、神崎忠男、橋本　清、小川　武、滝　紘之、梶　正彦、西村一夫、三渡忠臣、西村政晃、伊丹紹泰、桐生恒治、柳沢　宏、岩本和夫（担当理事）浅田治男

・**遭難対策**（委員長）金坂一郎（委員）川上　隆、松永敏郎、宮下秀樹、川上忠義、三渡忠臣、沢木勇二、春日直道、若林隆三（担当理事）橋本　清

・**学生部指導**（委員長）浜野吉生（委員）神崎忠男、伊丹紹泰、桐生恒治、福島健一、寺前紀夫、大杉直彦、竹中　昇、加藤秀之、内藤孝志（担当理事）牧野内昭武

・自然保護情報・

春スキーとゴミ

福島支部　武藤清次

山岳観光道路の開発による功罪についてはそれぞれ論はあるであろうが、われわれの立場から見た場合、まったく百害あって一利なしの感がある。道路の建設そのものによる自然景観の破壊はもとより、局部的な風向風速の変化などの自然環境の変化による動植物への悪影響、湿原の乾燥化等々数え上げればきりがない。そして自動車交通による植性の破壊は目に余るものがある。「セイヨウタンポポ」「オオバコ」「マツヨイグサ」「ヨモギ」等々の平地の雑草が高山植物の領域を侵しわが物顔に繁殖している。吾妻山浄土平の「セイヨウタンポポ」は、もはやどうにもならない状態にあり「ミヤマセイヨウタンポポ」の大群落だと溜息まじりの冗談が出るほどである。

自動車によって運ばれて来る人間が撒きちらす大量のゴミもまた、全国的に問題になっているように、環境汚染の一つの要因となっている。

吾妻山の場合、浄土平近辺や自動車道沿線は、清掃協議会で常時清掃を実施しているので、さほどゴミも目立たないが、一歩山に踏みこむと、ここぞと思う場所はいずれも空カンの山や焚火の跡で国立公園の看板が泣いている。

特に蓬莱山の春スキーの斜面はゴミがひどい。浄土平の西、蓬莱山の東斜面は、豊富な残雪と、自動車道から近いという条件のため春スキーでにぎわう所である。四月末自動車道が開通すると同時に色とりどりのスキーヤーがはいりこむが、雪の早くとける草地や笹原は彼等の絶好の休み場であり、またその一隅は空カンやゴミの山でもある。雪がとけてしまうとゴミの回収も困難な場所であるので、特にゴミの持ち帰りを徹底させる必要がある。

持って行ったものを全部もって帰るという簡単なことがどうして実行出来ないのであろうか。ミカンの皮一枚、レモンの皮一枚捨てても農薬汚染が考えられる昨今であるので、高校スキー部、各スキークラブ、スキー連盟等に働きかけ、ゴミ持ち帰り運動を推進させると同時に、パトロール強化によって運動の趣旨を滲透させて行かなければ本当のゴミの山と化してしまうであろう。

＊先般物故された中原万次郎氏ご遺族より日本山岳会へ五十万円のご寄付をいただきましたのでお知らせいたします。

ルーム日誌（52年7月）

1日（金）ルーム募金委員会
　学生部集会
4日（月）集会委員会
5日（火）自然保護委員会
6日（水）山研委員会
7日（木）海外連絡委員会
8日（金）指導委員会
　学生部集会
11日（月）理事会
14日（木）婦人懇談会
18日（月）集会委員会
19日（火）図書委員会
20日（水）三水会
21日（木）婦人懇談会
25日（月）集会委員会
28日（木）自然保護委員会
今月の来室者418名

会員異同

退会者

七三五二　本田　正寛（52・7・4）
一四一六　佐々木賢治（52・7・8）

除籍取消

七五七七　金井　昭吾（52・7・8）

支部変更

六九七九　国光　保雄（その他→関西）

物故者

六三四　加納　一郎（52・7・12）

四〇〇　斎藤　直一（52・6・27）
（52・7・18届出）

熊本支部
二十周年記念山行

日本山岳会熊本支部では、創設二十周年を迎えて左記の記念山行をおこないます。お誘い合せのうえ、ご参加ください。

日時　11月5日（土）6日（日）

場所　九州祖母山（明治23年同月同日に登ったウェストンの走跡をたどる）

集合　11月5日午後2時、宮崎県高千穂の民宿おがたま

申込み・問合せ　熊本支部西沢またはJAC本部事務局まで。

なお、詳細は各支部事務局に連絡する予定です。

『山岳』第七十年号訂正

★二九七ページ上段

「岩手大学山の会マルビチン登山隊（笠原潤二郎隊長ほか八名）」を「JAC岩手支部（笠原潤二郎隊長ら十名）」と訂正いたします。

『山岳』編集委員会

昭和五十二年九月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　西堀栄三郎
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

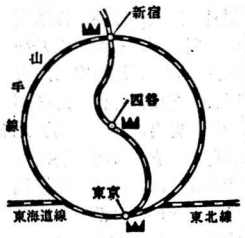
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3－5－7　(561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3－4－6　(561)0966　スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47　(364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4　(28) 3440

山の本

新刊

ナンダ・デヴィ縦走 1976

日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編

判型24cm×23cm　カラー一五〇頁
本文四二頁　定価三九〇〇円
ナンダ・デヴィは美しい双耳峰で、ガルワルヒマラヤの盟主である。本書はその主峰、東峰間の初縦走を為し遂げた日印合同登山隊の記録を、ダイナミックなカラー写真を主にして編集した。この縦走の成功は、ヒマラヤの高峰の登山に、またひとつの新しい可能性を切りひらいた。
内容　登山の記録／隊としてのまとめ、隊員・本部員の感想／Nanda Devi Trarerse 1976／資料
カットは主峰南稜に残されていたアイスハーケン

第二版

日高山脈

▲自然・記録・案内▼

北大山の会編　A五判三六二頁　定価二四〇〇円
日高山脈に始めて登山者が足を踏み入れたのは大正十五年夏のことである。以来五〇年余りの間に、この山脈の登路は歩きつくされた。しかし他の山岳のひらけ方に比べれば、この山脈は往時のおもかげを十分にのこしており、今なお岳人に注目されている。本書は北大山の会がながの年にわたり踏査、記録した成果をまとめたもので、地質、植物、動物、登攀史、登攀記録、登山の手引き、登山コースなど、日高山脈の全容を見事に描いている。

山の本販売目録 1977

茗溪堂編（2集）B六判二三四頁　定価九五〇円
この図書目録は一九七五年版を増補、改定したもので、書店で入手可能な山と探検をテーマとする本、約一〇〇〇点を選んで作成しました。

■出版目録送呈■お求めは最寄り書店で　茗溪堂　〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1　電話03-291-9442　振替東京8-24723